

企業の社会的責任・CSRの新たな視点について

熱田 親憲

On a new viewpoint of Corporate social Responsibility

Chikayoshi ATSUTA

1. はじめに

東日本を襲った3.11の大震災は、津波と震災と原発の放射能汚染という予想もつかぬ3重災害をもたらし、阪神淡路大震災以上の教訓、気づきを与えてくれた。

ここでは、復旧、復興、発展の方向に提言したい気持ちもあるが、被害全体の実態を掴みきれていないので、放射能汚染の元；東電の原発の事故処理を中心にして、CSRのあり方についていくつかの示唆を頂いたので、あるべき姿のCSRについてあらたな視点を述べたいと思う。

2. 結論

- (1) これまで企業のCSRは3つの側面；経済、環境、社会で説明されてきたが、地域産業育成の自覚に立つ地域性を4つ目の側面として考えていかねばならない。これまでの経済、社会に包含できるかもしれないが、地域の持続可能という視点を重視すると、地域性を加えたい。
- (2) 社会的責任の主体を考えると、企業の社会的責任CSR・Corporate Social Responsibilityばかり注目するのではなく、政府・地方自治体の社会的責任GSR・Governmental Social Responsibility, 世界・国際社会全体としての社会的責任USR・Universal Social Responsibility、そして市民の社会的責任CiSR・Civilian Social Responsibilityなどの4者の連携および統合的視点が必要である。
- (3) 企業の社会的責任CSRの環境的側面に地球温暖化のための省エネルギーが叫ばれているが、これに原発による放射能汚染リスク減少のための省エネルギーを追加すべきである。節電に2つの側面ができたのである。
- (4) またCSRの社会的側面に、人間の安全保障という視点から、被災者、紛争難民の緊急人道支援をいれるべきである。

3. 体験してきた企業の社会的責任

1960年に家電メーカーの社員になってから、会社のトップからは企業存続のために、市場競争において企業占有率を上げなければならないと日夜叱咤激励され、マーケティング戦略や戦術を常に考えさせられていた。売上額や占有率が上がれば市場的イメージや社会的イメージが上がり、優秀な人材が確保されて、企業の存続は保証されると思って頑張ってきた。その結果多額の納税をすることが社会への恩返しだと経営方針発表会でトップは胸を張っていた。今思うと、家電メーカーのトップは、戦後の荒廃した国民の各家庭に電化生活を取り入れてもらって、豊かな生活をしてもらうことが本当の社会貢献であり、そのために雇用の機会を広げ、ユーザーに安心して製品を使用してもらい、企業活動の結果としての利益から国に納税することが社会的義務だと思っていたと思う。この義務を果たささえすれば何をしても許されると思うほど政府・自治体や市民に甘えて（犠牲にして）きたように思う。

このような企業マインドは日本の全企業に浸透し、1970年代に入って右肩上がりの、売り上げ至上主義が絶頂期に入り、日本のGNP金額が第1位の米国を抜きトップに躍り出た。しかし同時に水俣病、四日市ぜんそく、日本海沿岸のイタイイタイ病などの公害病が明るみに出て、企業の工場排水、排煙の環境汚染の責任が問われ始めた。これらの生産者側の汚染責任に対し、自治体のクリーンセンターの処理排煙からのダイオキシンなどによる環境ホルモン汚染という公害責任が自治体に発生した。

1985年に入って、これまでの大量消費に支えられて右肩上がりの売上至上主義は、大量消費の減速で通用しなくなった。しかし大量消費のツケは顕在化し、自然破壊、地球温暖化などの宇宙汚染が顕著になってきた。これは国民の消費者としての社会的責任である。

1992年地球サミットが行われ、地域的な公害汚染から全地球規模の自然汚染が確認された。被害者は人間だけでなく動物、植物、微生物まで及んでしまった。これまた国民の消費の拡大が起因しているので、国民の社会責任は消費活動を通して拡大してきた。この責任は石油エネルギー消費のコントロールを意味して、代替エネルギーとして本格的な原子力発電を選んだ。選んだのは政府であり、協力は各地域の電力会社とし、石油と違って競争市場を持たない産業に位置づけてしまった。

2011年3月11日東日本大震災までは、原子力エネルギーは地球温暖化に影響する二酸化炭素CO₂を排出しない、原価の安い、安全なエネルギーとして広報されて、国民はそれを信じていた。これらの社会的常識を背景にして、これからの企業の持続可能な発展をするには、経済的繁栄、環境保全、社会的公平の3つの目標を同時に達成しなければならないというグローバルなコンセプトが出来上がった。(Elkington1998)

この3つの側面を具体的に細分化するとどんな項目、視点になるかを考えると、積極的に情報公開しているGRI（Global Reporting Initiative）の報告書の記載項目が参考になるのでここに挙げる。

表1. GRIの持続可能性報告書の記載事項

分野	側面	詳細項目
経済	直接的な経済的影響	顧客、供給業者、従業員、出資者、公共部門 (公正な競争と持続的な収益の確保が目標)
環境	環境	原材料、エネルギー、水、生物多様性、放出物・排出物廃棄物、供給業者、製品とサービス、法令順守、輸送、その他全般（世代間の公平と環境保全が目標）
社会	労働慣習と公正な労働条件	雇用、労使関係、安全衛生、教育訓練（多様性と機会均等）
	人権	差別対策、組合結成と団体交渉の自由、児童労働、強制・義務労働、懲罰慣行、保安慣行、先住民の権利
	社会	地域社会、贈収賄と汚職、政治献金、公正な競争と価格設定
	製品責任	顧客の安全衛生、製品とサービス、広告、プライバシーの尊重(社会的信頼の蓄積とそのため情報公開)

（出典；実践環境経営論 堀内行蔵 向井常雄 共著 東洋経済新報社）

4. 東日本大震災で学んだこと

(1) 地震、津波、放射能で変わった価値観の方向

「社会的側面」

- ①科学、技術への過信が文明機器の依存を生み、現場感覚がなくなって危機管理が不十分になっていた。機器はあくまでも人間の道具であって判断はできない。従ってマネジメントは人間の現場観察からはじまらなければならない。
- ②津波のパワーに驚き、自然の恵みの享受ばかりを考え、畏れを忘れていた。恵みと恐怖は共存していることに気づく。自然は克服するものではなく、協調すべきものである。
- ③海外からのトモダチ支援には限界がある。日本は自分で自衛し、自給自足のできる国家を目指すべきだ。
- ④災害による職場流出で労働条件の格差が生じ、コミュニティづくりに支障がでてくる。職場の復旧が先決だ。

「経済的側面」

- ①経済が、市場がグローバル化しても、海外依存なくして自立できる国の構築が必要であることを痛感。
- ②地域復興は地元産業がまず復興して職場ができ、人が集まると消費活動を賄う街が活性化し、復旧から復興へ、そして発展へと繋がっていく。
- ③放射能汚染地に消費者はなく、経済が成立しない

「企業の持続可能性」

- ①エネルギーの自己調達ができる社会システムが必要（エネルギーの多様化を背景にして）
- ②節電の必要は消費拡大による経済成長の限界を示唆
- ③地域産業の重視は農業、水産、林業の見直しと発展を意味する
- ④「自然に挑む」から「自然とともに」の考えにシフト
- ⑤50/60サイクルの解決で、電力の配電融通を全国レベルで行う必要
- ⑥共同体意識の強い市民の生活感覚を企業に取り入れる制度・仕組みづくり

（2）遅々とした東電の事故処理で感じたこと（マスコミ報道から）

- ①発電所の現場を祖孫までの下請け業者に、委託ではなく、まる投げ転化しているため現場感覚が遠くなり、現場に事故処理の指示を的確に与えられず、結果的に危険作業を強行させてしまっている。企業ではなくお役所のような対処行動である。これは分業化システムの悪い側面があぶりだされた。
- ②東電の社長は企画系で、技術に絶対の信頼をもっているのに、甘い安全対策が企業文化・企業体質になっている。従って、危険が予測できても予防システムのための組織を組まれていない。
- ③政府・官僚と距離のない企業幹部
住民への賠償問題の取り組みも会社幹部に加害者意識がうすいと言われても仕方ないほどである。これは原発導入を決めた政府・三木内閣により、否応なしに電力会社は導入を受けざるを得なかった背景が起因しているかもしれない。これがまた企業ガバナンスの脆弱さを生み、判断が出来ない、予測が出来ない、リーダーが居ない、ビジョンがない企業文化を培養してしまったように思う。だから、「想定外」も平気でいえるのであろう。
こんな政府からの導入経過は競争のない電力企業にしまったので、甘い体質は拡大して官僚天下りの一大コンツェルの大組織になってしまっていて、社会的責任を果たしにくい、硬直した組織になってしまったと思われる。
- ④責任は愚か倫理性ももてない組織になっていた。

（3）ジャパンプラットホームのトップ経験者の指摘（ある講演会から）

上記経験者とはフジゼロックス相談役有馬利男氏のことであり、彼は企業のCSRは次の4点を強化すべきだと強調されていた。

- ①国内外の被災地及び紛争難民への人道的緊急支援の必要
- ②地球温暖化とエネルギー問題を直視して本格対応せねばならない。（これまで、やや目を逸らしてきた面があったが、必須義務である）
- ③地域産業の復興・発展への参加（地域力なくして、国家はなし）

④差別化、競争力、市場創造などの経済的活動とCSRが背反せず、統合されることが望ましい。上記の中で最も重視したいのは地域産業の復興で、地域復興の最優先課題であるということ。地域産業とは地元産業や全国、世界レベルの産業すべてを指し、地元の雇用を支えている産業が先ず復興して雇用が戻らなければ、街づくりの家もコミュニティも発展しないということを示唆している。

（４）はじめて知った原発の安全神話のウソ

冊子「科学の目で原発災害を考える」（日本共産党 社会科学研究所長 不破哲三）で次の指摘をしている。

- ①原子力発電は米国海軍が開発した潜水艦用軽水炉型原子炉を、安全確認ないままにまるごと導入したものである。
- ②これには2つの弱点がある。その1は原子炉を常に冷却水で冷やす必要があること。その2は使用済み燃料の後始末システムが未開発のままであること。そのためウランが年間全国で1000トンが発生して、六ヶ所村の貯蔵プールも満タンに近いという。
- ③これをモンゴルの地下に処理工場・埋蔵するというが地球全体の公害汚染になるだけで解決にならない。
- ④従って原発は未完成で危険な技術であるといえる。
- ⑤この視点に立って、1961年に党大会で原発設置反対を声明し、1976年から1999年まで国会質問をしてきたという。
- ⑥今回の震災で、その1. 原発依存政策からの撤退、その2. 「安全神話」から手をきり、安全優先の審査と規制を確立 の2点を提言している。
- ⑦このレポートを科学的知識で裏付けるために、多くの関連書籍から「原発のウソ」（京都大学原子炉実験所 助教 小出裕章著 扶桑社）を選んだ。

（５） 書籍「原発のウソ」の結論は「原子力に未来はない」であった。

注目した点は以下の通りである。

- ①原発を止めても電力不足にはならない。火力発電所70%の稼働で十分対応。
- ②廃炉しても大量に残る負の遺産；核のゴミ、放射性物質を大量に含む使用済み燃料が残る。
- ③100万年の管理が必要な高レベルの放射性廃棄物が毎日生産されている
- ④核のゴミは100万年掛かるので誰にも管理できない。
- ⑤何より必要なのは無駄なエネルギーを使わないこと、これが脱原発の早道だ。
- ⑥地震地帯に原発を建てているのは日本だけ。その上に集中立地させていて、危険分散の発想は全くなし。

以上原発に拘わった内容が多くなったが、それだけ自然災害と放射線汚染にさらされる危険

の高い日本に住んでいるという、再認識が必要であろう。

5. 今後重視すべきCSRの新たな視点

- ①地震大国による津波被害・原発被害・放射能汚染や地球温暖化による自然災害・集中豪雨などにより、生命・生存の危機が増加してくる中で「人間個人の安全保障」の概念が生まれ、企業だけでなく、社会的責任のある他の主体がともに連携しながら、それぞれの責任を果たさなければならないときがきた。時には国境をこえての支援も必要になってきた。
 - ②大量消費による経済の量的成長の終焉を迎えた今、地球温暖化防止の必要と相俟って、エネルギー消費の節約を企業は率先して実行する責任がある。当然他の主体もこれに追随しなければならない。
 - ③日本の企業は能率的、合理的経営を追求するあまり、分業化、集中化が進行し過ぎて、無責任と危険分散できない体質になってしまった。特に競争原理の働かない独占の企業は自社に有利な企業理論で経営され勝ちで、社会から遊離しやすい危険がある。即ちCSRを果たしにくい企業体質になりやすい。
 - ④災害復興には、地域経済の復旧が最優先課題である。職場のないところに街はできない。地場産業は勿論、地域に根ざした企業の再稼動に各主体が一致協力することが大事。
 - ⑤緊急人道支援に企業も参加することが望ましい。助け合いで生命が繋がれば人は必ず街に留まり、街づくりや雇用に参加してもらえる。
 - ⑥地域性の強化は第一産業；農業・林業・水産業の見直しにつながるとも言える。
- 以上の視点から、前述の結論を導いたのである。(以上)

参考文献

1. 実践環境経営論 堀内行蔵・向井常雄 著 東洋経済新報社
2. 冊子「科学の目」で原発災害を考える 不破哲三著 日本共産党 社会科学研究所長
3. 原発のウソ 小出裕章著 扶桑社 2011
4. 毎日新聞記事スクラップ2011.3.11～2011.11.2

外国洞窟・カルスト名称の日本語表記について

—NullaborカルストとCarlsbad Cavernの例—

浦田 健作

Japanese Expression of Foreign Cave and Karst Names : Examples from Nullabor Karst and Carlsbad Cavern.

Kensaku URATA

要旨：地域研究の一環である地名研究の例として、外国洞窟・カルストの日本語名称の表記について報告する。明治34年以降現在に至るまで外国洞窟・カルストの日本語表記には現地呼称（原音）と異なる表記が多く見られる。1952年から2009年までに発行された文献を参照した結果、オーストラリアのナラボー・カルストについては64文献において12種類、アメリカのカールズバッド・キャバーンについては112文献において8種類の日本語表記が存在することが判明した。異なる表記が生じる主な原因は原音を確認することなく文献中の外国語表記をもとに日本語表記を創作するためと考えられる。原音と異なる表記をなくするためには複数文献のクロスチェックと音声情報からの原音聞き取り調査が有効である。

キーワード：地域研究、外国洞窟・カルスト名称、日本語表記、ナラボー・カルスト、カールズバッド・キャバーン

1. はじめに

地域研究において、地域単位につけられた名である地名の考察を欠かすことはできない。地名の成立過程には、自然条件に加えて民族（地域住民）の思想、文化、宗教、行政、歴史、民俗など、多様な背景が反映されており、人々の土地に対する認識世界やコスモロジー（世界観）がうかがえる（堀、1992）。地名のなかでも特異な景観を示す洞窟やカルストの名称には、地域空間の周辺にあって異世界と接触するシンボルとしての意味を持つことが多く、地域の人々の世界に対するイメージや精神世界を考察するうえで重要である。カルストや洞窟の名称に託された意味を理解するためには、その名称を正確に記述することが必要とされる。ところが日本における外国の洞窟やカルストの名称表記には従来現地呼称（原音）と異なる表記が多く認

められる。そこで本研究では地域研究の一環としての洞窟・カルスト名称研究の序章として、日本における外国洞窟・カルストの表記についての調査結果を報告する。

2. 外国洞窟・カルスト名称の日本語表記の歴史

古くは明治34年（1901年）、地学雑誌（東京地学協会発行）の雑報欄に世界最深のオーストリアの堅穴（現在はスロヴェニアに所属）、「トレビエ」（深さ321m）と「カエナ・ヤマ」（深さ304m）が紹介されている（無記名，1901）。しかし当時のヨーロッパにおける記録（Show, 1992など）に対照すると、「トレビエ」はTřebič「トレビチ」、「カエナ・ヤマ」はKačna jama「カチェナ・ヤマ」の誤りであることがわかる（洞窟名原音はスロヴェニア科学院カルスト研究所のナディア・ズパン・ハイナ Nadja Zupan Hajna博士に聞き取り）。これは原語の「č」を「e」と読み違えたことによる誤表記と思われる。この記事の出典は示されていないが当時スロヴェニアはオーストリア帝国領だったので、あるいは原語のスロヴェニア語からドイツ語に翻訳される際に誤った表記に変更されていたこともあり得る。なお、TřebičはGilli（1998）とその日本版（ジッリ，本多訳2003）ではアクセント記号が消えて「Trebic」ならびに「トレビック」と表記されている。

日本に外国の洞窟がよく紹介されるようになってきた1970年代以降においては、洞窟名を日本語表記した鹿島（1975，1976）、鹿島ほか（1977）、中川ほか（1982）、ウォルサム（藤井訳1982）、守田（1983，1992ab，1996ab）、近藤編（1995）、柳沢・佐々木（2001）、ジッリ（本多訳2003）、ルール（瀬戸口監修2005）などには原音と異なる表記例が見られる。いずれの文献にも日本語表記の根拠は記されていない。これらの文献については別稿での詳しい検討を準備中である。

3. NullaborカルストとCarlsbad Cavernの日本における表記

異なる日本語表記の多い例として、オーストラリアのNullaborカルストとアメリカのCarlsbad Cavernについて1952年から2009年までに発行された文献における日本語表記を調べた。

(1) Nullaborカルスト

Nullaborカルスト（写真1）はオーストラリア大陸南部のグレート・オーストラリア湾に面した海岸から内陸のグレート・ビクトリア沙漠にかけて広がる面積22万km²（南北400km、東西800km）の平原である。オーストラリア最大のカルスト地域であり、世界的にも中国南部からベトナムにかけて分布するカルスト地域（面積50万km²）に次ぐ規模を持つ。Nullabor平原カル

表1 Nullabor の日本語表記例
Table 1 Japanese expressions of Nullabor.

日本語表記 Japanese	出典 Reference
ナラーバー	日本地図学会編 (1955), 下中編 (1963, 1968, 1974, 1976, 1977, 1979, 1984a), 相賀編 (1968), TBSブリタニカ・帝国書院編 (1971, 1988, 1991, 1994), 国際地学協会出版部編 (1980), 平凡社編 (1980), 旺文社編 (1980), 野村ほか編 (1982, 1983), ウォルサム (藤井訳 1982), 帝国書院編集部 (1985), 昭文社 (1989), 帝国書院・エッセルテマップサービス社編 (1987), 木内ほか (1991), Green編 (正井・金沢監修 1995), デルフ・ケンプ (松村監訳 1998), 秋庭編 (1996), セール編 (2004), 谷治ほか編 (2008), 日外アソシエーツ編 (2008)
ナラバー	相賀編 (1972, 1976)
ナラーボー	下中編 (1985, 1987, 1990, 1991, 1993, 1996), 小学館 (2009)
ナラボー	相賀編 (1984, 1989), 教育社編 (1992), 浦田・岡本 (1995), 浦田 (2001), 日外アソシエーツ編 (2008), 小学館クリエイティブ (2009)
ナラーボア	下中編 (1984, 1985, 1987, 1990, 1991, 1993, 1996, 2003, 2005, 2009), 講談社 (1992), 教育社編 (1992), 昭文社 (1989), 日外アソシエーツ編 (2008)
ナラルボル	帝国書院編集部・ベルテルスマン社 (1967)
ヌラーバー	全国教育図書 (1952, 1960)
ヌラーバー	全国教育図書 (1964), 全教図 (1978, 1980), 全教出版 (1992, 1994, 2006)
ヌーラーバー	日本地図学会編 (1955)
ヌラーボー	下中編 (1952)
ヌラボア	ジッリ (本多訳 2003)
ヌラルボア	ジッリ (本多訳 2003)



写真1 オーストラリア, ナラボーカルスト。

Photo 1 Nullabor karst, Australia.

ストとも呼ばれ、現地では明確に「ナラボー」と発音されている（浦田・岡本, 1995；浦田, 2001）。日本で発行された世界地図と地理学文献64例において日本語表記を調査したところ、表1に示したように「ナラバー」「ナラーバー」「ナラボー」「ナラーボア」「ヌラーバー」など12通りにも表記されていることが判明した。

「ナラーバー」という表記が最も多く用いられている。出版社の傾向としては、世界地図の出版点数が多い平凡社は1950年代が「ヌラーボー」、1960年代から1980年代前半までが「ナラーバー」で、1980年代半ばから1990年代半ばの10年間は「ナラーバー」と「ナラーボア」の両方を用い、それ以降は「ナラーボア」だけになっている。小学館は出版物によって「ナラーバー」、「ナラバー」と「ナラボー」、「ナラーボー」が用いられていたが最近では「ナラーバー」、「ナラバー」になった。全国教育図書（全教出版）は1960年代半ばに「ヌラーバー」から「ヌララーバー」に変わってそのまま現在に至っている。これらの変遷の理由は不明である。

ナラボーの名は「木がない」という意味のラテン語「null-arbor」に由来する。ラテン語の発音は「ヌル・アルボル」に近い表現となる。おそらく多くの著者・編集者たちは、オーストラリア方言である現地呼称（原音）を確認しないままにラテン語読みと英語読みをあれこれ組み合わせて日本語表記を作った（読んだ）のだろう。現地呼称については、1986年8月1日にNHK総合テレビで放映された「NHK特集大自然の誘惑～オーストラリア～探検・地底の湖」で現地の関係者が「ナラボー」と発音しているのが記録されている。また2011年に公開された映画「サンクタム」（ユニバーサル映画）において、探検隊の一員がオーストラリアの砂漠での洞窟探検について話す場面で「ナラボー」と発音しているのが聞き取られた。

（2）Carlsbad Cavern

世界最大級の地下空洞として著名なアメリカ合衆国ニューメキシコ州のCarlsbad Cavern「カールズバッド・キャバーン」（同国立公園洞窟担当スペシャリスト、ジェイソン・M・リチャーズ Jason M.Richards氏に原音を聞き取り；写真2）についてはさらに複雑だ。国立公園やユネスコ世界遺産に指定されているカールズバッド・キャバーンは、世界最長洞窟Mammoth Cave「マンモス・ケイブ」（ケンタッキー州）とともに日本で言及されることが多い洞窟である。洞

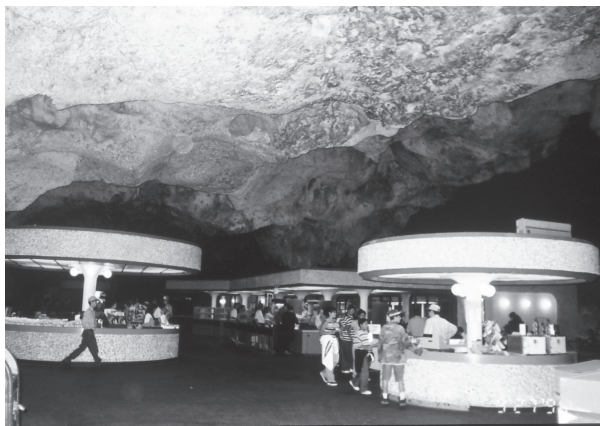


写真2 アメリカ、カールズバッド・キャバーン。
Photo 2 Carlsbad Cavern, USA.

表2 Carlsbad Cavern の日本語表記
Table 2 Japanese expressions of Carlsbad Cavern.

日本語表記 Japanese	出典 Reference
カールズバッド *洞窟名ではなく地名として記載	
カールズバッド・キャバーン	森川 (1961), 小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会編 (1973), Watson (浅野訳 1973, 1988), 三井 (1975, 1986), 相賀編 (1984), 作野 (1985), 小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集委員会編 (1994)
カールズバッド・キャバン	ギブニー編 (1988)
カールズバッド・キャヴァーン	中屋ほか責任編 (1963)
カールズバッド・キャヴァーン	朝日新聞社出版局編 (1981), 松田ほか編 (1984, 2002)
カールズバッド・カバーン	野間編 (1971, 1972), 竹林編 (2002)
カールズバッド・ケーバーン	全国教育図書 (1964), 全教図 (1978), 全教出版 (1992, 2006)
カールズバッド洞窟	リーダーズダイジェスト (加藤・奥村訳 1981), タトル (1995), 小西・南出編 (2001), 井上・藤井編 (2001), データワールド編 (2007), 小学館クリエイティブ (2009), 小学館クリエイティブ (2009), 小学館 (2009)
カールズバッド洞くつ	小学館編 (2007)
カールズバッド洞穴	ギブニー編 (1973)
カールズバッド*	TBSブリタニカ・帝国書院編 (1971, 1988, 1991, 1994), 下中編 (1979), 平凡社編 (1980), 全教図 (1980), 帝国書院・エッセルテマップサービス社編 (1987)
カールスバッド	
カールスバッド・キャバーン	山内 (1970), 三省堂編修所編 (1985, 1998), 日外アソシエーツ編 (2008)
カールスバッド・キャヴァーン	木内ほか (1991), 講談社 (1992)
カールスバッド・ケーブ	村中・赤木 (1970)
カールスバッド洞	村中・赤木 (1970), ウォルサム (藤井訳 1982), 中川ほか (1982), デービス (守田訳 1991)
カールスバッド洞窟	祖父江 (1962), 昭文社 (1989), 辻原(1995), デルフ・ケンプ (松村監訳 1998), 講談社 (1998), 世界遺産研究センター (1999ab), 講談社総合編集局・エイジャ編 (2001), ルール (瀬戸口監修 2005), 谷治ほか編 (2008), 日外アソシエーツ編 (2008)
カールスバッド洞くつ	モーア・ニコラス (大久保監訳 1973)
カールスバッド洞穴	相賀編 (1979), 日外アソシエーツ編 (2008)
カールスバッド*	全国教育図書 (1952, 1960), 野村ほか編 (1983), Green編 (正井・金沢監修1995), 田辺総監修 (1999), Barnitzkeほか (那須ほか訳 2003)
カールズバード	
カールズバード・キャバーン	帝国書院編集部・ベルテルスマン社 (1967), 矢ヶ崎 (1984, 1988, 2009), 下中編 (1984b, 1985, 1987, 1990, 1991, 1993, 1996, 2003, 2005, 2009)
カールズバード・キャヴァーン	原 (1973), 日外アソシエーツ編 (2008)
カールズバード・カバーン	佐藤 (1966), 下中編 (1968, 1976, 1977, 1984a), 浅野 (1977), 遠藤 (1979), 小稲編 (1980)
カールズバード・カヴァーン	能 (1965)
カールズバード・ケーブ	相賀編 (1972, 1976)
カールズバード鐘乳洞	相賀編 (1968), 正井 (1968)
カールズバード洞	ジャクソン・タイムライフ編集部 (1984)
カールズバード*	相賀編 (1989), 教育社 (1992), 秋庭編 (1996), 国際地学協会・東京印書館編 (2001)
その他	
カールズバット洞	鹿島 (1975), 帝国書院編集部 (1985)
カールスバット洞	鹿島ほか (1977), 中川ほか (1982)
カールスバード・キャバーン	ハゲット編 (田辺監修 1996)
カールスバード・カヴァーン	能 (1956), 佐藤 (1957)
カールスバード洞窟	白尾 (2007)
カールスバード*	野村ほか編 (1982)
カールスバード*	旺文社編 (1980)

窟学文献、地理学文献、主要な世界地図、百科事典、英和辞典、図鑑類の記述114例を参照したところ、原音に近い「カールズバッド」のほかに「カールスバッド」「カールズバード」、そして「カールズバット」「カールスパット」「カールスパード」「カールスバド」「カールスバード」と微妙に異なる表記が頻出していることが判明した(表2)。その結果からは洞窟学・地理学文献(原, 1973; モーア・ニコラス 大久保監訳, 1975; 鹿島, 1975; 中川ほか, 1982; ウォルサム 藤井訳, 1982; 三省堂編修所編, 1985, 1998など)の表記が必ずしも原音に従っていないこと、出版社ごとに傾向があること(カールズバッド: 小学館, カールスバッド: 講談社, カールズバード: 平凡社・講談社)、英和辞典の多くは原音を採用していることなどがわかる。なかには平凡社「世界大百科事典」のように改訂にあたって「カールスバード」(佐藤, 1957)から「カールズバード」(佐藤, 1966)へと変更された例もある。

このような混乱が生じた要因としてCarlsbadという地名の起源が影響していると考えられる。Carlsbad市の公式ホームページ(City of Carlsbad, 2010)やギブニー編(1988)によると、19世紀末に創設されたTown of Eddyと呼ばれていた町に鉱泉が産出したことから、チェコ、ボヘミア地方のカルロヴィ・ヴァリ温泉のドイツ語名Karlsbadにちなんで1918年にCarlsbadに名称変更された。相良編(1961)によるとドイツ語のKarl(カール)は英語のCharls(チャールズ)に相当する男性名、Bad(バート)は浴場や温泉場であるからKarlsbadは「カールの温泉場」という意味でカタカナでは「カールスパート」と表記される。神聖ローマ皇帝カール4世(ボヘミア王としてはカレル1世: ドイツ語のカールはチェコ語ではカレルとなる)がこの地で温泉を発見した伝説にもとづく地名である。しかしこれにも「カールスバッド」や「カールスバード」「カールズバート」などとする表記が見られる。このような背景から英語地名Carlsbad(カールズバッド)とドイツ語地名Karlsbad(カールスパート)とが混同されて、原音を確認することなく順列組合せ的に複数の日本語表記が発生したのだろう。

4. 外国語地名表記の問題点

洞窟名や洞窟所在地名の外国語表記を日本語表記に変換することは、外国語に堪能であっても容易ではない。世界的に普及しているローマ字(ラテン・アルファベット)においても、その表記・発音は国によって独自の規則があり、また同じ国でも地域によって発音が変わることが稀ではない。固有名詞である洞窟名や洞窟所在地名は極めて地方的であることが多い。日本で最も普及している外国語である英語にしても同様だ。例えば守田(1992b, 1996ab)では、イギリス南西部メンディップの観光洞窟、Wookey Holeが「ウッキーの穴」、Gough's Caveが「ゴアの洞窟」と表記されているが、メンディップに在住するブリストル大学地理学科ピート・スマート Pete Smart 教授ならびにブリストル探検クラブのレイ・マンズフィールド Ray Mansfield 氏から聞き取った両洞窟の原音は「ウッキー・ホール」と「ゴーフズ・ケイブ」である。

このように外国語表記を日本語表記に変換することは外国語を「読む」ことにほかならない。そのため、外国語表記と現地で発音されている原音とのあいだには隔たりがある場合、誤表記が発生しやすい。読むことによって生じる誤表記を訂正するためには、複数の文献でクロスチェックするとともに、音声情報からの聞き取り調査が有効だろう。音声情報からの聞き取りによって原音から日本語音を決め、日本語表記する方法が必要である。このような表記の問題は外国語に限らず日本の地名研究においても共通する。

謝 辞

東京都立大学大学院・堀 信行名誉教授（現奈良大学）には著者が同大学院博士課程在学時から地名研究について目を開いていただいた。佐賀大学農学部・染谷 孝博士には文献収集に援助をいただいた。日本洞窟学会測量・記録委員会の石川典彦委員長、木崎裕久副委員長には本研究全体への支援・助言をいただいた。大阪経済法科大学・沢 勲名誉教授、故大橋健教授、愛媛大学・鹿島愛彦名誉教授には研究全般にわたってご指導いただいた。これらの方々に深く感謝する。

参考文献

検索の便宜のために一般文献、世界地図、百科事典、辞事典・図鑑、言語辞典に分けて掲載する。

(1) 一般文献

- City of Carlsbad 「About Carlsbad, New Mexico.」 <http://www.cityofcarlsbadnm.com/> 2010.12.01 21:00
デービス、W. M. (守田 優訳) 「石灰洞の起源（その1）」大阪教育大学地理学会会報、21号（大阪教育大学 1991）26-35頁。
- Gilli, É. (1998), L' exploration spéléologique et ses techniques 《Que sais-je?, 3362》. 127pp. Presses Universitaires de France, Paris.
- ジッリ、É. (本多 力訳) 『洞窟探検入門』文庫クセジュ 860（東京、白水社2003）168頁。
- 堀 信行「土のイメージ・石のイメージ―方名・地名・物語にみる自然とひととの交流」『日本のサンゴ礁地域 2 熱い心の島 サンゴ礁の風土誌』（サンゴ礁地域研究グループ編、東京、古今書院1992）31-47頁。
- ジャクソン、D. D.・タイムライフブックス編集部（上野俊一・斉藤靖二監修）『ライフ地球再発見シリーズ 洞窟』（東京、西武タイム 1984）176頁。
- 鹿島愛彦・森本義信・伊藤田直史・仁賀克雄（山内 浩監修）『学研ワールド科学館 地底探検』（東京、学習研究社1977）96頁。
- 講談社（ユネスコ世界遺産センター監修）「カールスバッド洞窟群国立公園」『ユネスコ世界遺産』13巻（新指定）（東京、講談社1998）24-31頁。
- 講談社総合編集部・株式会社エイジャ編「カールスバッド洞窟群国立公園」週刊ユネスコ世界遺産29号（講談社2001）24-25頁。
- 近藤純夫編『ケイビング入門とガイド』（東京、山と溪谷社1995）259頁。
- モーア、G. W.・B. G. ニコラス（大久保雅弘監訳）『洞くつの科学―スペレオロジーへの道』（東京、築地書館1973）153頁。
- 守田 優「オーストリアの観光洞」洞人4巻（日本洞窟協会1983）56-66頁。
- 守田 優「ヨーロッパの洞窟（2）―スペイン―エレン&ストリナチ著（抄訳）」洞人9巻（日本洞窟協会

- 1992a) 82-92頁。
- 守田 優「ヨーロッパの洞窟 (3) - イギリス-エレン&ストリナチ著 (抄訳)」洞人9巻 (日本洞窟協会 1992b) 130-141頁。
- 守田 優「ヨーロッパの洞窟 (洞穴) 一覧」『カルスト その環境と人びとのかかわり』(漆原和子編、東京、大明堂1996a) 174-176頁。
- 守田 優「ヨーロッパの洞窟」地理学報31号 (大阪教育大学地理学教室1996b) 91-133頁。
- 無記名「世界最深の天然井」地学雑誌13巻 (東京地学協会 1901) 372-373頁。
- 村中 (民義)・赤木 (三郎)「文献紹介 J. H. Gardner, Origin and Development of Limestone Caverns, Bull. Geol. Soc. Amer., 46, pp.1255-1274, 1935」洞くつ研究2号 (地学団体研究会洞くつ研グループ 1970) 26-28頁。
- 中屋健一・鈴木二郎・矢沢大二 (責任編集)『講談社版世界の文化地理』15巻 (アメリカ合衆国) (東京、講談社1963) 396頁。
- 中川寛一・木村洋紀・今村 修・山田博明・下地義久・神谷夏実・庫本 正 (永田孝文監修)「世界の洞窟」『探検と科学シリーズ① 素晴らしき地底の世界』(東京、日本テレビ1982) 129-144頁。
- リーダーズダイジェスト (加藤雄志・奥村 清訳、市川正巳・奥村 清監修)『奇跡の大自然』(東京、日本リーダーズダイジェスト社1981) 471頁。
- 世界遺産研究センター編 (古田陽久・古田真美監修)『世界遺産ガイド アメリカ編』(広島、シンクタンクせとうち総合研究機構1999a) 127頁。
- 世界遺産研究センター編 (古田陽久・古田真美監修)『世界遺産ガイド 自然遺産編』(広島、シンクタンクせとうち総合研究機構1999b) 127頁。
- Shaw, T. R. (1992) History of cave science : the exploration and study of limestone caves, to 1900 (2nd edition). 338pp. Sydney Speleological Society, Sydney.
- 白尾元理「カルスバード洞窟」『子供の科学サイエンスブックス 世界のおもしろ地形』(東京、誠文堂新光社2007) 104頁。
- 祖父江孝男「南西部砂漠地帯」『世界地理風俗大系』2巻 (アメリカ合衆国Ⅱ) (世界地理風俗大系編集編、東京、誠文堂新光社1962) 312-324頁。
- タトル、M.D.「嫌われ者北米のコウモリの意外な生態」ナショナルジオグラフィック日本版1巻5号 (1995) 62-83頁。
- 浦田健作「ナラボー平原-世界最大の乾燥カルストと地底湖」地理48巻8号 (古今書院2001) 1-3頁、40-47頁。
- 浦田健作・岡本 透「IGCPプロジェクトNo.299 地質, 気候, 水文とカルスト形成-オーストラリア・フィールドシンポジウム報告-」洞窟学雑誌19巻 (日本洞窟学会1995) 40-46頁。
- 柳沢忠昭・佐々木清文 (鹿島愛彦監修)「世界のカルストと洞穴」『洞穴ガイドブック』(岩泉、日本洞穴学研究所2001) 40-41頁。
- ウォルサム、A.C. (藤井厚志訳)『洞窟の世界』(福岡、葦書房1982) 128頁。

(2) 世界地図

- 秋庭 隆編 (正井泰夫・久保幸夫監修)『世界大地図館』(東京、小学館1996) 383頁。
- デルフ、B.・R.ケンプ (岩村 彰訳、松村正樹監訳、田代 博監修)『ビクチャーアトラスシリーズ 絵でみる世界大地図最新版』(東京、同朋社1998) 80頁。
- Green, D.R. 編 (正井泰夫・金沢 敬監修)『ビジュアル・ワールド・アトラス』(東京、同朋社出版1995) 168頁。
- 平凡社編『最新世界地図帳』(東京、平凡社1980) 321頁。
- 木内新蔵・班目文雄・澤田 清・金澤 敬・市川武夫・東京書籍 (木内新蔵監修)『最新世界地図』(東京、東京書籍1991) 150頁。
- 講談社 (梅棹忠夫・前島郁雄監修)『講談社/タイムズ世界全地図・ライブアトラス』(東京、講談社1992) 403頁。
- 国際地学協会出版部編 (中野尊正監修)『世界地図帖』(東京、国際地学協会1980) 153頁。
- 国際地学協会・東京印書館編 (中野尊正監修)『Union atlas 世界地図』(東京、国際地学協会2001) 230頁。
- 教育社編 (竹内均・西川 治総監修)『ニュートンワールドアトラス』[改訂第1版] (東京、教育社1992) 252頁。
- 日本地図学会編 (北田宏蔵監修)『新修世界地図』(東京、日地出版1955) 95頁46付図。
- 野村正七・梅原正巳・相沢孝七・田代 博・川嶋理夫編『アトラス現代世界』(東京、昭文社1982) 397頁。
- 野村正七・梅原正巳・相沢孝七・田代 博・川嶋理夫・堀 英雄編『世界地図帳 エアリアマップ』(東京、

昭文社1983) 215頁。

旺文社編『旺文社世界大地図』。(東京、旺文社1980) 224頁。

相賀徹夫編『世界原色百科事典別冊(世界各国地図)』(東京、小学館1968) 151頁。

相賀徹夫編『大日本百科事典 ジャポニカ』23別巻(世界大地図)(東京、小学館1972) 151頁。

相賀徹夫編『万有百科大事典』23巻(世界大地図)(東京、小学館1976) 151頁。

相賀徹夫編『日本大百科全書 最新総合大地図』(東京、小学館1984) 326頁。

相賀徹夫編(市川正巳監修)『世界大アトラス』(東京、小学館1989) 447頁。

セール、C. 編(ジャレックス訳)『絵でわかる世界大地図』(東京、ネコ・パブリッシング2004) 128頁。

下中 弘編(梅棹忠夫・佐藤 久・西川 治・正井泰夫監修)『世界大地図帳』[2版](東京、平凡社1990) 297頁。

下中 弘編(梅棹忠夫・佐藤 久・西川 治・正井泰夫監修)『世界大百科事典 世界地図』(東京、平凡社1991) 367頁。

下中 弘編(梅棹忠夫・佐藤 久・西川 治・正井泰夫監修)『世界大地図帳』[3版](東京、平凡社1993) 305頁。

下中 弘編『世界大地図帳』[4版](東京、平凡社1996) 367頁。

下中邦彦編(田中 薫・E.B. エスペンシェード Jr. 監修)『世界地図帳』(東京、平凡社1963) 276頁。

下中邦彦編『世界大百科事典』26巻(世界地図)(東京、平凡社1968) 253頁。

下中邦彦編『世界地図帳』[3版](東京、平凡社1974) 272頁。

下中邦彦編『世界地図』[8版](東京、平凡社1976) 267頁。

下中邦彦編『世界大百科事典』[9版] 35巻(世界地図・日本地図)(東京、平凡社1977) 287頁。

下中邦彦編『国民百科事典』15巻(世界地図)(東京、平凡社1979) 321頁。

下中邦彦編『平凡社版世界地図』[4版](東京、平凡社1984a) 267頁。

下中邦彦編(梅棹忠夫・佐藤 久・西川 治・野村正七・正井泰夫監修)『世界大地図帳』(東京、平凡社1984b) 273頁。

下中邦彦編(梅棹忠夫・佐藤 久・西川 治・正井泰夫監修)『常用世界地図帳』(東京、平凡社1985) 296頁。

下中直也編(梅棹忠夫・佐藤 久・西川 治・正井泰夫監修)『スタンダード・アトラス世界』(東京、平凡社1987) 397頁。

下中直人編(梅棹忠夫・佐藤 久・西川 治・正井泰夫監修)『世界大地図帳』[6版](東京、平凡社2003) 340頁。

下中直人編(梅棹忠夫・佐藤 久・西川 治・正井泰夫監修)『世界大百科事典』33巻(世界地図)(東京、平凡社2005) 302頁。

下中直人編『世界大百科事典』[2009年改訂新版](世界地図)(東京、平凡社2009) 303頁。

下中彌三郎編『大百科辞典』, 別巻(世界地図)(東京、平凡社1952) 150頁33付図。

昭文社『ペテルスマン世界地図帳 日本版』(東京、昭文社1989) 607頁。

小学館(正井泰夫監修)『小学館世界大地図』(東京、小学館2009) 271頁。

小学館クリエイティブ(正井泰夫監修)『小学館世界大地図』(東京、小学館2009) 270頁。

TBSブリタニカ・帝国書院編(木内信蔵・佐藤 久・西川 治・高崎正義監修)『ブリタニカ国際地図』(東京、ティービーエス・ブリタニカ1971) 593頁。

TBSブリタニカ・帝国書院編(木内信蔵・佐藤 久・西川 治・高崎正義監修)『ブリタニカ国際地図』[改訂版](東京、ティービーエス・ブリタニカ1988) 593頁。

TBSブリタニカ・帝国書院編(木内信蔵・佐藤 久・西川 治・高崎正義監修)『ブリタニカ国際地図』[第2版改訂版](東京、ティービーエス・ブリタニカ1991) 577頁。

TBSブリタニカ・帝国書院編(木内信蔵・佐藤 久・西川 治・高崎正義監修)『ブリタニカ国際地図』[第5版](東京、ティービーエス・ブリタニカ1994) 593頁。

帝国書院・エッセルテマップサービス社編『サミットワールドアトラス』(東京、帝国書院1987) 247頁。

帝国書院編集部『新詳高等社会科地図』(東京、帝国書院1985) 150頁。

帝国書院編集部・ペテルスマン社『基範世界大地図』(東京、帝国書院1967) 322頁。

谷治正孝・川嶋理夫・田代 博・萩原康之・堀英雄編『世界地図帳』[第2版](東京、昭文社2008) 240頁。

全国教育図書『標準世界地図』[昭和27年版](東京、全国教育図書1952) 139頁64付図。

全国教育図書『標準世界地図』[4版](東京、人文社1960) 178頁64付図。

全国教育図書(田中啓爾監修)『新世界地図』(東京、人文社1964) 183頁。

全教出版(田中啓爾監修)『グランド新世界大地図』(東京、人文社1992) 229頁。

全教出版『最新世界地図』(東京、人文社1994) 96頁。

全教出版『グランド新世界大地図』(東京、人文社2006) 167頁。

全教図(田中啓爾監修)『グランド世界大地図』(東京、人文社1978) 211頁。

全教図『現代世界詳密地図』（東京、人文社1980）215頁。

（3）百科事典

- 浅野重夫「鍾乳洞」『国民百科事典』7巻（下中邦彦編、東京、平凡社1977）131-132頁。
- 遠藤佐介編（小林珍雄・坂崎乙郎・野上素一・林健太郎監修）「カルスト地形」『21世紀世界百科カラマ』2巻（東京、主婦と生活社1979）566-567頁。
- ギブニー、F.B.編「カールズバッド洞穴国立公園」『ブリタニカ国際大百科事典（小項目事典）』2巻（東京、ティービーエス・ブリタニカ1973）109頁。
- ギブニー、F.B.編「カールズバッドキャバーンズ国立公園」『ブリタニカ国際大百科事典（小項目事典）』[2版]2巻（東京、ティービーエス・ブリタニカ1988）102頁。
- 鹿島愛彦「洞穴」『万有百科大事典』18巻（宇宙地球）（相賀徹夫編、東京、小学館1975）485-486頁。
- 鹿島愛彦「洞窟とは何か」月刊百科12巻171通号（東京、平凡社1976）8-9頁。
- 正井泰夫「カールズバッドキャバーンズ国立公園」『大日本百科事典ジャポニカ』5巻（相賀徹夫編、東京、小学館1968）65頁。
- 三井嘉都夫「鍾乳洞」『万有百科大事典』18巻（宇宙地球）（相賀徹夫編、東京、小学館1975）306-307頁。
- 三井嘉都夫「鍾乳洞」『日本大百科全書』12巻（相賀徹夫編、東京、小学館1986）75-77頁。
- 森川六郎「鍾乳洞」『国民大百科』4巻（下中邦彦編、東京、平凡社1961）56-58頁。
- 能登志雄「カールズバッドカヴァーンズ」『世界大百科事典』6巻（下中弥三郎編、東京、平凡社1956）248頁。
- 能登志雄「カールズバッドカヴァーンズ」『世界大百科事典』5巻（下中邦彦編、東京、平凡社1965）133-134頁。
- 野間省一編「カールズバッドカバーンズ」『現代世界大百科事典』1巻（東京、講談社1971）593頁。
- 野間省一編「カールズバッドカバーンズ」『現代世界大百科事典』[増補分冊版]3巻（東京、講談社1972）197頁。
- 相賀徹夫編「洞穴と地下水」『原色図解大事典』3巻（地球と資源）（東京、小学館1979）138-139頁。
- 作野和世「カールズバッド・キャバーンズ国立公園」『日本大百科事典』5巻（相賀徹夫編、東京、小学館1985）901頁。
- 佐藤久「鍾乳洞」『世界大百科事典』14巻（下中弥三郎編、東京、平凡社1957）506頁。
- 佐藤久「鍾乳洞」『世界大百科事典』11巻（下中邦彦編、東京、平凡社1966）485頁。
- 矢ヶ崎典隆「カールズバッド・キャバーンズ国立公園」『大百科事典』3巻（下中邦彦編、東京、平凡社1984）793頁。
- 矢ヶ崎典隆「カールズバッド・キャバーンズ国立公園」『世界大百科事典』[改訂版]6巻（下中弘編、東京、平凡社1988）193頁。
- 矢ヶ崎典隆「カールズバッド・キャバーンズ国立公園」『世界大百科事典』[2009年改訂新版]6巻（下中直人編、東京、平凡社2009）194頁。
- 山内浩「洞穴」相賀徹夫編、『大日本百科事典ジャポニカ』13巻（相賀徹夫編、東京、小学館1970）159-160頁。
- Watson, L.J. (浅野重夫訳)「アメリカ合衆国のおもな国立公園と自然保護区」『ブリタニカ国際大百科事典』7巻（ギブニー、F.B.編、東京、ティービーエス・ブリタニカ1973）569-571頁。
- Watson, L.J. (浅野重夫訳)「アメリカ合衆国のおもな国立公園と自然保護区」『ブリタニカ国際大百科事典』[2版]7巻（ギブニー、F.B.編、東京、ティービーエス・ブリタニカ1988）569-571頁。

（4）辞事典・図鑑

- 朝日新聞社出版局編『朝日旅の百科海外編』25巻（メキシコ、アメリカⅢ）（東京、朝日新聞社1981）1921-200頁。
- Barnitzke, H., M. Elser, G. Bock, U. Klocker, N. Pautner & C. Wenk（那須 忍・坂本マインベルグ千恵・澤田一真・谷本バルタイト美枝子訳）『ビジュアル大事典世界の国々』（東京、昭文社2003）328頁。
- データワールド編（稲葉信子・斎藤英俊監修）『ポプラディア情報館 世界遺産』（東京、ポプラ社2007）244頁。
- ハゲット、P. 編（田辺 裕・安部一訳、田辺 裕監修）『図説大百科世界の地理』1巻（アメリカ合衆国Ⅰ）（東京、朝倉書店1996）145頁。
- 原真「カールズバッドキャバーンズ Carlsbad Caverns」『世界地名大事典』5巻（アメリカ・オセアニアⅠ）（渡辺 光・木内信蔵・山口恵一郎・式正英・正井泰夫・竹内啓一編、東京、朝倉書店1973）179頁。
- 井上謙治・藤井基清編『アメリカ地名辞典』（東京、研究社2001）495頁1付図。

日外アソシエーツ編『外国地名よみかた辞典』（東京、日外アソシエーツ2008）944頁。
ルール、J.（日本語版総監修瀬戸口烈司）「地下河川と洞穴」『地球大図鑑』（東京、ネコ・パブリッシング2005）252-259頁。
三省堂編修所編（谷岡武雄監修）「カールスバッド・キャバーズ国立公園」『コンサイス外国地名辞典』[2版]（東京、三省堂1985）223頁。
三省堂編修所編（谷岡武雄監修）「カールスバッド・キャバーズ国立公園」『コンサイス外国地名辞典』[3版]（東京、三省堂1998）215頁。
小学館編（丸山茂徳・花輪公雄・中村 尚・江口孝雄監修）『小学館の図鑑NEO』10巻（地球）（東京、小学館2007）183頁。
田辺 裕総監修『世界地理大百科事典』3巻（南北アメリカ）（東京、朝倉書店1999）595頁。
辻原康夫「カールスバッド洞窟」『世界の地名ハンドブック』（東京、三省堂1995）72-73頁。

（5）言語辞典

小稲義男編「Carlsbad Caverns National Park」『新英和大辞典』[5版]（東京、研究社1980）327頁。
小西友七・南出康世編「Carlsbad Caverns National Park」『ジーニアス英和大辞典』（東京、大修館書店2001）352頁。
松田徳一郎・横山一郎・東 信行編（松田徳一郎監修）「Carlsbad Caverns National Park」『リーダーズ英和辞典』（東京、研究社1984）337頁。
松田徳一郎・高橋作太郎・東 信行・木村建夫編（松田徳一郎監修）「Carlsbad Caverns National Park」『リーダーズ英和辞典』[2版]（東京、研究社2002）387頁。
相良守峯編『木村・相良独和辞典』[新訂版]（東京、博友社1961）1792頁。
小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会編「Carlsbad Caverns」『小学館ランダムハウス英和大辞典』上巻（東京、小学館1973）393頁。
小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集委員会編「Carlsbad Caverns」『小学館ランダムハウス英和大辞典』[2版]（東京、小学館1994）1863頁。
竹林 滋編「Carlsbad Caverns National Park」『研究社新英和大辞典』[6版]（東京、研究社2002）386頁。